



授業風景

it's a small world

教育人視点①

キャンパス見学でみた奇跡の源泉

「国際教養大学を「奇跡」ですませるのか」

国際教養大学
学長

中嶋 嶺雄

小さな大学が放つ大きな希望

開学の翌年、2005年6月24日に東京のある会場で中嶋学長の講演を聞く機会があった。すでに高い入試倍率を誇り、注目度も高かったのだが、なるほど、その訳がわかった。国際教養大学(AIU)の「改革」は驚きを通り越え、実にエキサイティングなものだった。全てが英語の授業、教員の半数以上が外国人で、少人数教育(1クラス15名程度)が歓迎されるのはわかる。が、今どきの若者に敬遠される「入寮」が初年度に、また1年間の「海外留学」も義務づけられる。しかも、留学はTOEFL550点以上の条件付きだ。進級や

卒業には欧米で導入されているGPA(累積成績評価平均点)をクリアしなければならぬ。にもかかわらず、秋田杉の森に囲まれたキャンパスを目指し、全国から学生が押しかけるのである。

あれから7年。AIUは就職実績でもその実力を見せつけ、人気がとどまる所を知らない。マスコミはAIUを「奇跡」とたたえ、テレビ・新聞・雑誌への露出は増すばかりだ。ただ、不思議なのは、そうして随所で種明かしをされているにもかかわらず、AIUに追いつき、追いついたという大学を聞かない。果たして、その違いはどこにあるのか。無論、大学によって条件は異なるだろう。だが、単に条件の違いだけですか、いいものだろうか。

就職環境が厳しさを増すに連れ、AIUの評価はより一層の高まりを見せる。2012年度の就職率はほぼ100%、その先に日本を代表する著名企業が居並ぶと聞けば、学生のみならず保護者までが関心を持たないはずがない。折りしも企業のグローバル化に拍車がかかる中、小さなAIUが放つ希望の光は途轍もなく大きい。

キャンパスが明かす秘密

ビデオ放映から始まったキャンパス見学は、続いて授業参観へと移った。驚いたのは一般人も教室に入って見学できること。外国人教員2人と日本人教員による英語、数学、政治の3授業が公開された。もちろん授業は全て英語である。

おそらく広報課と教員、そして学生まで事前の打ち合わせや連絡が行われているのだろう。すぐに授業に溶け込み、俄か学生にでもなった気分になる。外国人教員がやって来て

「質問はないか」と訊ねたのはさすがにびっくりましたが、これも大学全体のチームワークのなせる技に違いない。

その後、キャリア開発センターや24時間眠らない図書館、LDIC(言語異文化学習センター)、さらに学生寮なども案内された。いずれも学びを中心にした快適な生活空間を形作っている。AIUと言えば中嶋学長ばかりが目されるけれど、この大学の真の強さは、学長のリーダーシップもさることながら、その思想に共鳴し、協力を惜しまない教員や職員の組織力にある。

大学の規模が小さくても、単科大学であっても、立地条件が良くなかろうとも、相互理解と相互信頼の基に組織が機能すれば、どんな大学でも改革が実現することをAIUは教えている。

建学時の方針からぶれなかった

——大学改革の旗手とも言われますが、それが実現できた理由をお聞かせください。

最初は不安もありました。最近の若者が寮生活について行けるか。また、海外留学をする学生が減っている中、それを義務付けて、本当に優秀な学生が集まるだろうか。だが、それは杞憂に終わりました。一般入試では競争率20倍を超えたとし、入学者の学力は高い。世間で言われるような内向きでもない。というより、留学生と部屋をシェアすることに楽しみを覚えてさえます。

留学するに当たってはTOEFLの得点条件を課しますが、そのために留年をしてもこちらが心配するほど深刻には考えていない。むしろ楽しみながら取り組んでいるように見えます。



今にして思えば、建学当初の方針がぶれなかったこと、それを信念として貫いたことの結果と言えます。加えて言うなら、執拗に各々の役割を遂行してくれた教員や職員、そして学生の努力の賜物と言っても過言ではないでしょう。

どんな大学でも問題はあります。が、それを本格的に変えようとか、改善しようとかしない。大学人の中でも、とりわけ国立大学の教員は、公務員としての身分が保証されてきたせいで、既得権益と現状維持が本分になっている。そこに問題があるのではないのでしょうか。

テーマは「知の鎖国」への挑戦

——改革のテーマは何ですか。

一言で言うところ、「知の鎖国」に対する挑戦です。真の大学のグローバル化を目指し、日々努力するだけです。ご存知の通り、20年程前に

ドイツでベルリンの壁が取り去られ、ソ連邦が崩壊しました。そしてIT革命が進み、本格的なグローバル時代が到来します。ところが2004年の本学の開学時点で、国公立大学は日本の公務員でないと学部長や学長になれませんでした。

こんな状態で日本の高等教育が、日本が、世界に伍して行けるはずがありません。そもそも我が国は世界から学ぶ、つまり教育で近代化を果たしてきました。そんな国が自国の殻に固く閉じこもって、世界に目を向けないのはナンセンスです。

本学では、開学に当たり元多摩大学学長グレゴリー・クラーク氏を副学長として招きました。そしてその成果も得ています。そのひとつが、「暫定入学制度」。僅差で不合格となった学生を1年間の修学成績によって正規学生(2年次)に認める制度です。一例を挙げると、東京外大に受かり、本学に暫定合格した学生がいます。秋田県の出身ということもあつたでしょう。本学を選択して、その結果、トップクラスで卒業し、モルガン・スタンレーに就職しました。暫定だからこそ頑張るのです。こうした例は枚挙に暇がありません。入試についても常識に縛られていません。多様な人材を集めるため16種類もの入試を準備しています。入試時期を一般の前期・後期試験とずらすことによって、少しでも優秀な学生が獲得できるような努力もしています。

最近話題の秋入学については、開学当初からすでに導入済みで、入試倍率も高い水準を維持しています。よく話題になる就職問題においても、ほぼ100%が職に就いています。から、秋入学がハンデになるとは思いません。大事なことは入学の時期ではなく教育の中

身、即ち、カリキュラムです。留学生を受け入れるための制度であれば、英語で実施できる科目をどれだけ増やせるか。また学生寮の準備や学生の評価基準も必要です。秋入学を導入するには、それに対して大学がいかに変わるかにかかっているとも言えるのです。

余談ですが、東大の「ギャップチーム」は和製英語。「ギャップイヤー」が正しい使い方です。

継続するにはシステムが不可欠

「改革」を声高に叫びながら頓挫してしまふことがよくあります。原因はそれを維持・継続するためのシステムが欠けているからです。

少人数教育は学生にとって有益であると同時に勉強をせざるを得ない環境を作っています。TOEFLやGPAなどの条件を課すことが、サボれない、前に向いて進まざるを得ない装置となつて強力に働いています。

教職員に対する「3年契約の年俸制」にしても同じ理由からです。今日AIUが高く評価されるのは、教員や学生が敢えて厳しい環境に身を置き、そこで頑張り抜いた結果なのです。

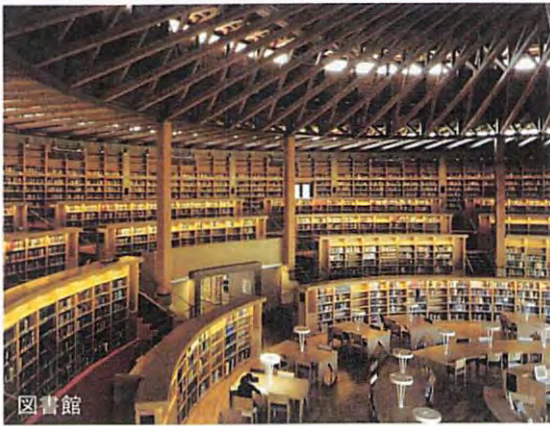
38カ国・地域131校と提携している留学制度においても、しっかりとシステムが築けたから、これまで継続しており、今や本学の名物にもなっています。たとえば、米国の大学の学費は年間300万円程度必要ですが、本学の年間学費、約70万円を充当するだけで、そこへ留学ができます。それを可能にするにはタフな交渉が必要ですし、他校では真似のできない部分でしょう。これも本学が蓄積したノウハウであり、それをシステムティックに活用するのも大学の知恵に他なりません。

グローバル教育の基本は教養教育

——教育における基本方針は？

本学のようにグローバル人材の育成を目指す大学に求められるのは、何と言っても英語教育の充実ですが、英語に堪能な人間を育てて終わりではありません。英語をツールとして世界の人々と自由にコミュニケーションのできる人材の育成ができてはじめて目的は達成されるのです。

そこで、学生には狭く深くというより、幅広く学べるカリキュラムを取り揃えています。たとえば、「芸術・人文科学」「社会科学」「数学・自然科学」「学際研究」「世界の言語と言語学」「保健体育」「日本研究」といった分野に分け、それを基盤教育と位置付けて指導します。1990年代に解体された大学の教養教育の復活と考えて頂いても結構でしょう。



図書館

また、この教育をスムーズに進めるために、グローバル・ビジネス課程やグローバルスタディズ課程などの学部に分けた入試選抜を取って行っています。学部選抜は、しっかりと基礎を積んでから改めて行えばいいことです。

グローバル教育に関する新しい動きとして、現在、本学の他に早稲田大学国際教養学部、国際基督教大学、立命館アジア太平洋大学と一緒に「グローバル4」と銘打って活動しています。

具体的には、学生の交換や教員の交換研究などを行ったり、4大学が一堂に会して研究会を開催することもあります。

自分を活かせる企業に就職

——就職に関する方針を聞かせてください。

現在、各種マスコミが本学の就職力のことを取り上げています。わざわざ本学までお運び下さる企業も多数あります。それは非常にありがたいことであり、学生たちの能力を正當に評価して頂いている証と見ればうれし限りです。

ただ、時折、グローバル化を英語化と勘違いして学生を求めてこられる企業があります。それは本学が考えるグローバル化とは根本的に違いますし、その中に入った学生も困惑してしまつてしまう。そういう場合は、大学としても勧めません。

実は、学生の就職先には顕著な特徴があります。それは、金融・商社でも外資系でもなく、日本のメーカーに就職する割合が高いことです。理由は、留学して日本を客観的に見る機会を得るからです。日本の技術力の高さを、「技術立国日本」の存在を改めて感じるよ

うです。

キャリア開発センターもその事実を知り、今年から大学で行う企業説明会には技術者の同伴をお願いしていると聞いています。かわいい我が子を送り出すのですから、それくらい我がままはご容赦願いたいものです。

日本全体のレベルを上げる

——日本の大学を見て、特に感じられることはありますか。

お蔭様で、年3回開催するオープンキャンパスには全国から多数の参加がありますし、それ以外の見学者も大変多い。入試の併願大学では開学当初の東京外大、上智大や国際基督教大などから、最近では東大、京大、一橋大などが目立って増えています。こうして志願者の数が増え、学力もアップするのは好ましいことですが、それで安心してはいません。世界に目を向ければ、東大が香港大やシンガポール大にランキングで抜かれたことがあります。来る大学の国際化を踏まえても、日本の大学が協力し合って底上げを図る必要があると考えます。

周知の通り、あと6年もすれば18歳人口が激減して行きます。そうなれば当然大学の淘汰が進みます。そんな厳しい環境の中で生き残るためには、本物の大学、即ち質の高い教育を提供する大学であることが必須条件です。単に入試制度を触って学生を集めたりするのではなく、どうしたら本物の教育サービスが提供できるか、それを今、真剣に考える時です。

批判力をもち自己主張できる人材に

——未来のAIU生に対するメッセージは？

本学の教育は英語で学び、英語で考えることが特徴です。英語力はしっかりと磨いて頂きたい。細かな文法などはひとまず横に置き、英語で小論文を書くことをお勧めします。グローバル社会を生き抜くには、自分の意見をはっきり伝えることが肝心です。それを訓練するには、考えを小論文形式にまとめるのが効果的なのです。批判すべきことは批判し、言いたいことは素直に言う。そうして自分のアイデンティティを確立することが何より大切です。

そんな学生をAIUは心より歓迎します。

……7年前中嶋学長が自ら予備校回りをしていると聞いて心が躍った。時はめぐって今年、札幌・秋田・仙台・東京・名古屋・大阪・福岡と全国を縦断するという。敢えてお歳は聞かさない。



国際教養大学 理事長・学長
国際社会学者 東京外語大学 元学長

中嶋 嶺雄

教育人会議

kyoikujinkaigi

特集●夢ナビライブ2012北九州会場 開催レポート

高校生に学問をプレゼンする!

九州工業大学の取組み

教授・PBL教育推進室長 中尾 基 教授・学長特別補佐(広報担当) 白土 竜一

東筑高等学校の取組み

福岡県立東筑高等学校 教諭 井上孝志 橋本寛

高校生アンケート&インタビュー



教育人对談

50年前の有名大学がなぜ今も有名大学のまなののか。

ジャーナリスト 田原 総一郎

河合文化教育研究所 主任研究員 丹羽 健夫

夢トリガー

夢ナビは自らの「調べ学習」によって進むべき道が主体的に見出せる。

国立愛媛大学附属高等学校 進路指導部 高橋 寛明

夢ナビは結果が次の可能性を示し、開かれた未来に目を向けさせる。

静岡県立浜松北高等学校 進路指導部長 山本 耕司 教諭 西川 昌宏

夢ナビVISION

日本の未来を支える逸材を、一人でも多く輩出すること。

教育人視点

国際教養大学を“奇跡”、ですませるのか

国際教養大学 学長 中嶋 嶺雄

求められる高大連携のキャリア教育。

お茶の水女子大学 学生支援センター准教授 望月 由起

夢先案内人

私の夢を継いでくれる高校生たちに。

京都大学 工学部物理工学科 機械システム学コース 教授 松野 文俊

高校生に直接触れ、彼らを熱くしたい!

首都大学東京 システムデザイン学部 航空宇宙システム工学コース 准教授 佐原 宏典

夢ナビALL STARS

夢ナビにご協力いただいている
全教員2,308人のご紹介。